

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-18

横田が画題を《—— ママ》にしたのは、パロディではなく、ゴヤに捧げるオマージュとして名付けた。当然ながら、捧げられるゴヤに相応しいクオリティが、その作品になれば、陳腐なからかいに終わってしまう。

東京芸術大学美術学部日本画科で学んだ横田が、ゴヤと同世代で近世日本画家の一人、伊東若冲や浮世絵師の葛飾北斎ではなく、どうしてゴヤに魅せられたのか、その答えは、あのフィンセント・ファン・ゴッホの最晩年の傑作、『星月夜』や『カラスのいる麦畑』などが葛飾北斎や歌川広重の浮世絵師達の作品から大いなる特別な創造的思考を受けた事例の逆バージョンと言える。

副題に《光と影》と付けられる程の明暗のコントラストが際立っているゴヤの作品の中で、横田が特に惹かれたのは、聴覚を失った時に研ぎ澄まされた目で描かれた『カルロス四世の家族』と戦争画『プリンシペ・ビオの丘での銃殺』である。

要するに、送り手と受け手の間に均衡の取れた高いレベルが介在しなければ、この度の制作意図は茶番に終わってしまう。

『着衣のママ』と『裸のママ』は二千六年十月末に仕上がった。

「完成祝いをかねて、日本海へ越前ガニを食べにいかないか？取って置き宿を知っているんだ。近くに世話になっている越前和紙の工房があってね。今回は無理を聞いてもらったし、久しぶりに顔を出してきたいんだ」と横田はシャンパングラスを片手に、アトリエに並べられた二つの絵を見比べながら、おもむろに切り出した。

自宅マンションで遅い朝食をとってから、昨夜の売り上げなどの事務整理をしていた真紀は、横田から絵が出来上がったから見に来ないかと連絡があったので、出入りの酒屋に祝い酒用のドン・ペリニヨン・ロゼを二本届けてもらい、タクシーを呼んだ。

クラブの経営者として本業の合間に、画家から手直しの要請があれば、幾度となく可能な限り、やりくりしてモデルを務めた

完成された二つの絵画を目の当たりにした真紀は、自分がモデルであったことさえも忘れてしまうほど感動していた。

真紀は予期せぬ越前への誘いと粋な計らいに、二重の喜びを味わっていた。

「越前……、連れて行ってください！」と真紀は満面の笑みを浮かべて答えた。